

「もうひとつの教室」を求めて

菅 佐和子

Searching for Another School-Class

Sawako SUGA

Key word: School-class, Free school, Small group

はじめに

筆者は、長年に亘って、「不登校」をはじめとしてさまざまな学校不適応を呈する児童・生徒の心理の理解と、援助の方法を探る試みに取り組んできた。その過程のなかで、もっともストレスの高い場は「教室」であると感じるようになった。教室が皆にとって楽しい場所になることが理想ではあるが、現実には、どうしても教室に自分の居場所を見出せない子どもたちも多い。そこで、彼らのために、「もうひとつの教室」が準備されなくてはならないのも事実である。ひとりでこもる時間は大切であるが、「教室に居られないから、仕方なく、ずっとひとりぼっちで家にこもっている」というのは、どう考えても望ましいとはいえないであろう。そういう場合、やはりその子の状況に適した「もうひとつの教室」に参加する道を準備したいものである。

そのような場に参加することで、仲間のなかに自分の居場所を見出した子どもたちは、他者との交流の楽しさを体験し、同世代の仲間と内面を共有することを通して自己価値を確認し、他者への共感を育てるなど内的成長が促進されることが多いようである。とにかく、それまで昼夜逆転の生活を続けていた子どもが、行き場所を見出したために朝起きることができるよう

になるのは、ひとつの大きな変化とみなせよう。

そのような、小さな場のもつ意味を考えるなかで、「現在の教室に失われたもの、過剰なものは何か？」を問い直してみることは、最近関心を集めている教育改革にとって有用なヒントとなるのではないだろうか。

その上で、「もうひとつの教室」の具体例として、筆者が直接または間接にその活動内容に触れてきた、①学校内の別室、②学校外の適応指導教室、③学校外のフリースクール（フリースペース）など、の三種の集団について眺めてみたい。

「学級（クラス、教室）」の重みと功罪

「学校が苦手」という子どもの多くは、学校全体というより、自分の「学級（クラス、教室）」が苦手なのではないだろうか。

一日の大半を占める学校での生活のなかで、中心を占めるのは自分の学級での時間である。そこが居心地の悪い場所である場合、学校生活が楽しいものになるのはまず不可能ではないだろうか。

学級というのは、少なくとも一年間、固定されたメンバー（原則として、全員が同年齢）とともに過ごすことが決められている集団である。途中でメンバー交替もなく、嫌になったか

らといって隣の学級に移ることも許されてはいない。いわば、「四角い箱のなかに閉じ込められ、逃げも隠れもできない」のが普通である。われわれは、それを「当たり前」のこととして受け止めてきたが、改めて考えてみれば、これはなかなか「きびしい」環境であるといえるのではないだろうか。

一人ひとりの子どもは、成熟度に差があって当然であり、体力も学力も性格も千差万別である。しかし、学級内では、同じ「年齢」であるというそれだけの理由で、全く同じ課題が与えられ、皆が同じレベルに到達することが当然とみなされているようである。「競争」を是としてあからさまに順位づけをするか、実際には存在している差異を建前としては「ないこと」にしておくかの違いはあっても、子どもたちが「評価」によって縛られ、いやおうなくそれを知っているという現実には変わりはないであろう。

同年齢集団とは、もちろん、それゆえの楽しさはあるであろうが、同時に情け容赦のない「生存競争」の場にもなりうることを忘れてはならないであろう。当然、そこには大きなストレスが発生する。そのストレスを発散するために、強力な仲間のいないメンバーの誰かを標的にすることもめずらしくないようである。

運悪く「いじめ」などの標的になってしまい、この学級集団における人間関係に疲れ果てた経験を有する青年たちは、「生徒」であることを終えた後も、自分と同年齢の人々が集まる次の集団にはどうしても入りたがらないことが多いようである。

しかも、「もういちどあんな体験をするかもしれないと思うと、どうしても足が前にでないのです」という言葉がカウンセリングの場面で自発的に語られるまでには、かなりの時間がかかるのが普通である。こういう種類のこころの傷は、理解の及ばない人にはどう説明しても通じないであろうが、たとえカウンセラーとはいえ見ず知らずの相手にすぐに語れるような「わかりやすい傷」ではないのである。このような

ケースに出会うたびに、筆者は、われわれにとっての「学級（クラス、教室）」の「重み」「功罪」を見つめなおすことの必要性を感じずにはいられないのである。

そもそも、わが国において、なぜ「学級」がこれほど絶対的ともいえる存在であり続けてきたのであろうか。深谷¹⁾は、日本の近代教育の歴史を概観している。それによると、明治30年代の、国策に沿った国民皆就学の動きのなかで効率のよい教育が目指され、「個人ではなく、集団を単位に教育を進めるシステム作り」すなわち「学級制の導入」が行われたことがわかる。それに伴い、学級内のまとまりを保つための「児童管理規則」と、どの教師でも一定レベルの授業ができるための「授業のパターン化」が設定され、明治末期に至ると、全国の学校で「教師による一斉授業を基本とした伝達型の授業形態」が定着するに至ったというのである。明治時代に形成されたこの「日本型学校文化」は、100年以上の時間が流れた今日でも基本的には変わることなく続いているとみなせよう。昭和20年の太平洋戦争終戦後、家庭文化や地域社会の文化が大きく様変わりした中で、学校文化だけは、「淘汰機能」こそさらに強化されたものの、全体としてほとんど変わらずに続いてきたことは改めて注目に値しよう。

これだけの時間の重みだけでも、相当なものである。われわれにとって、学級とは、どこか相対化しにくい対象なのである。そのため、それについて正面から問い直すことは、「自明の理」に疑いをさしはさむにも等しいこころの抵抗を惹き起こすといっても、あながち大袈裟ではないかもしれない。

だからこそ、その学級に適應できないとき、他のどの場所に適應できないことにもまして、個人の苦しみが深くなるのかもしれない。現在、そのような個人が増加してきたことは確かである。100年の歴史を持つ学級文化とはいえ、ようやく変化の時期を迎えつつあるといえよう。既存の学級だけを絶対視するのではなく、それ以外に、そこからはみ出した児童・生徒の

「受け皿」が不可欠であることを契機として、さまざまな「もうひとつ学級」の存在が、ようやく認められるようになってきた。それらの小さな集団の果たす積極的な意義を認識し、それらを育てていく過程を通して、100年の歴史をもつ従来の学級自体の改革をも視野に入れるべき時期に来ているとみなせよう。

さまざまな「もうひとつの教室」

これに関しては、筆者^{2・4)}は既に何度か取り上げて論じてきた。ここでは、それらをまとめて、簡潔に記述しておきたい。

① 学校内の別室

「学校へは行きたい、行くべき」と思っているが、本来の教室にはどうしても入れない、居続けられない児童・生徒のためには、学校のなかにもっと居やすい場所が準備されることが必要である。

本来の教室に居続けられない理由は、言葉で尋ねられても説明しきれるものではない。無理に言語化させ、苦し紛れの言い訳を聞いたところで、問題の解決には寄与しないのではない。ただ、学業自体に興味がもてない、ついていけないことが苦痛となっているのか、人間関係が苦痛になっているのか、その両方であるのか、の識別はある程度可能であろう。

それらの情報を踏まえて、「では、どういう部屋なら、その児童・生徒は出て来れるだろうか?」ということを検討するのが、第一歩であろう。あまり人目にさらされず出入りができること。外から覗き込まれないようカーテンやブラインドがしっかりしていること。広すぎるのも落ち着かず狭すぎるのも息苦しいので、適切な広さであること。仲間とともに囲めるテーブルと、ひとりで静かに座ってられる壁際の机椅子の両方があることが望ましい。鉢植えの植物、本、マンガ、雑誌、ゲーム、ぬいぐるみなどが適当に置かれているのも、リラックスできてよいのではないかと。

なによりも大切なのは、そこにどのような人材が配置されているかである。どのように設備

が整っていても、人のぬくもりのない場では、児童・生徒のころは育つまい。子供同士の交流が大切であるのは言うまでもないが、それを支え、マネジメントの労をとるには、子どもの心を理解し、適切な対応のとれる専門性を備えた人材がそこに居ることが肝要であろう。以前は、別室として機能するのは保健室のみであった。現在では、怪我や急病などをはじめとして多様な校務を義務付けられている保健室だけでは到底対応しきれず、「相談室」「ころの教室」などが設置されている。ただ、それが、結果的に学校内の「姨捨山」「座敷牢」になってしまわないためには、教職員、児童生徒、保護者の意識改革が必要であろう。

学校内の「別室」と本来の教室との物理的距離は、わずかなものである。しかし、時には、その間に深くて広い心理的な「溝」が存在することを忘れてはなるまい。両側からその「溝」を越える取り組みこそが、何よりも望まれる。

② 学校外の「適応指導教室」

学校の門をくぐることで自分がストレスになる児童・生徒にとっては、学校以外の場所に「別室」があることが有用である。現在では、全国に800をゆうに越える教育委員会などが主催する「適応指導教室」が設置されている⁵⁾。筆者は、「適応指導教室」の運営上、大切な視点は、「学校へ戻ることだけに汲々としなない」ということではないかと考える。目的はあくまでも、「その子どもが将来、社会のなかに居場所を確保できるだけの力を育む」ことである。学校教育の目的も、基本的にはそうであったはずである。学校へ行くことは、そのためのプロセスであり、それ自体が目的ではないはずである。ところが、現実にはそのプロセスが自己目的化して、あまりに重く個人の上ののしかかっているのではないかと、感じるのがなきにしもあらずである。もし、学校外の小集団に、そのような機能を期待できるならば、それを活用することが得策ではないだろうか。現実には、「適応指導教室」と学校内の「別室」は雰囲気似ていることもあり、連携がとりやすいのも確かである。

ある。

ここで必要な条件は、学校内の「別室」と基本的には同じである。他者の目を気にしなくてよいだけ、より気楽に出入りできること、独自のプログラムを組んで多彩な活動がしやすいことなどが利点であろう。元の学級を回避したまま、ここから「卒業」して、次の段階で今度はより大きな集団に参加できるようになることも、案外多いように見受けられる。勿論、それで「すべて乗り越えられた」と言い切れるわけではないのが……

③ 民間のフリースクール（フリースペース）など

これは、②よりも早くから、活動が行われてきた分野である。

これは、②よりさらに学校から距離が保たれている小集団である。それだけ、個人の意思で自由に参加でき、また多彩なボランティアスタッフなどの力を結集して、自由度の高い独自のプログラムを提供することも可能である。また、②は原則として義務教育の期間に限られるので、それ以後の参加が許されるのは、こちらのみであろう。そこで貴重な体験を積んだ子どもたちが、今度はスタッフとして後輩のために尽力するというバトンタッチも行いやすいのではない。

ただ、当然のことながら、費用の点で②のように無料とはいかないであろうし、「質」の保証がどのようになされるかという点にも課題があるかもしれない。

②と③の中間に、「半官半民」的な小集団も存在する。いずれにせよ、市民社会の成熟を背景にして、この領域のさらなる発展が大いに期待されよう。

「もうひとつの教室」の存在意義

これまで述べてきたことを、簡潔にまとめて、もうひとつの「教室」の存在意義を確認しておきたい。

1. 仲間とのふれあいを体験できる（信頼感の回復などに有用である）。

2. さまざまな指導者・支援者との出会い（兄姉代理などとの出会いが、人間関係を広げる契機となる）。

3. 自分の自主性、ペースが尊重される（自信・主体性の獲得、自己確認などが可能となる）。

4. さまざまな生活体験を積む機会となる（興味の喚起、技能の獲得、共感性・協調性の発達などに役立つ）。

5. 必要に応じて、個別に学習支援が受けられる。

6. その他

おわりに

学校生活は、子どもにとってきわめて大切ではあるが、長い人生のうちの一部に過ぎないことも事実である。仮にそこで躓いても、それに代わるより適切な場を提供することで、「若者が社会のなかで主体的に生きることのできる力を育てる」という視点を大切にしたい。それは、わが国にとっての深刻な課題である「社会的ひきこもり」を予防するためにも、ぜひとも必要なことではないか。

また、青少年だけではなく、どのような世代の人々にとっても、地域社会のなかに「気軽に足を運ぶことができ、他者と交流のできる、ぬくもりのある場」を、数多く作り上げてゆくことが望まれる。

謝辞：末尾ながら、本報告の作成に際し貴重なご援助を賜りました、宇治市教育委員会青少年課指導主事・松崎満先生、臨床心理士・辰巳朋子先生はじめ関係各位にこころより感謝致します。

文 献

- 1) 深谷昌志：「学校」の終焉と再生。東京成徳大学臨床心理学研究，2002：2，86-93
- 2) 菅佐和子：「不登校」という現象についての一考察。健康人間学（京都大学医療技術短期大学部紀要別冊），1993：5，16-26

菅 佐和子：「もうひとつの教室」を求めて

- 3) 菅 佐和子：不登校対策の多様性をめぐり一考察.
健康人間学（京都大学医療技術短期大学部紀要別冊），1999：11，46-54
- 4) 菅 佐和子，木之下隆夫編：学校現場に役立つ臨床心理学．東京：日本評論社，2001
- 5) 谷井淳一，沢崎達夫：適応指導教室における体験的活動が不登校児童生徒の回復過程に果たす役割に関する研究．平成11，12，13年度科学研究費補助金基盤研究(C)2)研究成果報告書，2002